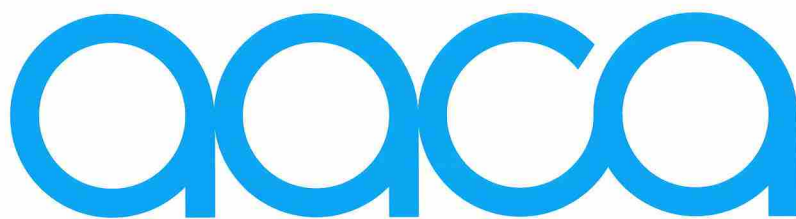


2017.7 no.77



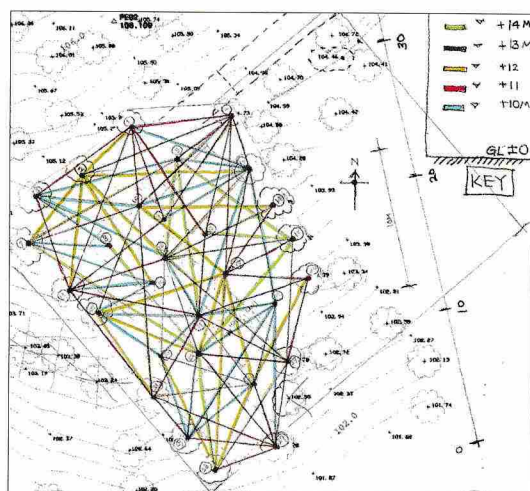
一般社団法人 日本建築美術工芸協会



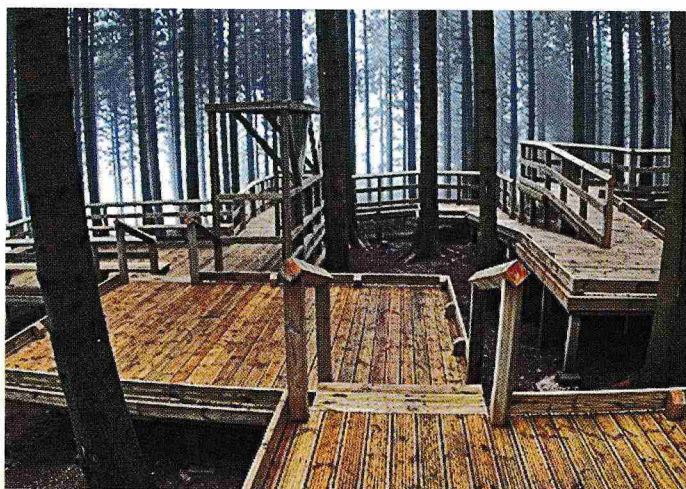
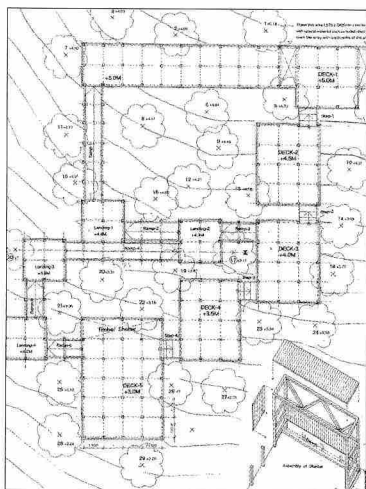
MIRAGE DECK 2006 Kisa KAWAKAMI / 川上喜三郎 Kielder Water & Forest Park, U.K.

MIRAGE DECK / 蜃気楼舞台 2006

北イングランド、650 平方キロ、ヨーロッパ最大の広大な植林人工湖公園、1982 年女王ご臨席で開園。此のリクリエーション、スポーツ公園は芸術振興公共団体、各種団体からの支援を得て 1990 年代以降パブリックアートが設置されている。2004 年、キュレーターの招待を受け現地を数日散策。大自然の中にオーダーのある植林グリッド、大きな空と広大な湖の「おもて」に関わりたいたと感じた。「光と影、そして反射」シリーズ「蜃気楼舞台」の設置である。



公園全域の植林の位置、レベルが正確に測量されているので既存 29 本の樹を選び地上 10 ~ 14m の高さ 5 層にワイヤーをデッキの上に吊るす (上図)。ワイヤーから吊られたステンレスの円盤 1000 枚が風にゆらぎ 広大な空と湖水面を反射して暗い森がキラキラと輝く。なだらかな地上面には森をぬって、木製の階段 & スロープが大小矩形 10 組のプラットフォームを繋げる (下図)。この回遊デッキは 森林浴、瞑想の場、屋外セミナーの場に、サイクリングのルートの拠点としての休憩スポットになる。密かに此処がファッションショー、満月の明かりに「能舞台」にでもなればと願っています。Why not ?



川上喜三郎 王立英国建築家協会建築家 造形作家 AACA 会員

早稲田大学建築学科、同大学院修了。ジュエリー、プロダクトデザインから建築、アーバンデザイン迄をモットーにロンドンを拠点に日英米で活動。ロンドン市カムデン区役所集合住宅建築設計部を経て AA スクール教授 (1982 ~ 94)、複数のロンドン大学建築学科卒業計画の外部審議官 (1989 ~ 2004)、新国立劇場デザインアドバイザー、TAK 建築研究所との共同プロポーザルコンペに 3 連続最優秀賞；郡山美術館、東京現代美術館、三鷹文化センター (1990)、日産スタジアム炬火台コンペ最優秀賞案設置 (1998)、京都迎賓館あかり計画、広域計画では三菱地所丸の内計画アドバイザー (1998 ~ 2006)、日建設計大阪と共同；北梅田開発コンセプト国際コンペ最優秀賞 (2004)、グランフロント大阪設計アドバイザー (2008 ~ 2013)、エストニア タリン市音楽舞踏祭の舞台装置 (2010) など

CONTENTS

■平成 29 年度 通常総会

平成 29 年度 通常総会	4
平成 29・30 年度 協会組織図	6

■寄稿

日本建築美術工芸協会創立 30 周年と 芦原義信生誕 100 年記念	岩井光男	7
---------------------------------------	------	---



▶▶ 4

■aaca 景観シンポジウム開催報告

「個と群」アーティストと建築家のコラボレーション	川瀬俊二	8
aaca 景観シンポジウム「個と群」に参加して	松田真理子	9



▶▶ 8

■平成 28 年度 AACAA 賞

[AACAA 賞 優秀賞] MIZKAN MUSEUM	小川大志	10
[AACAA 賞 優秀賞] ヤマノイエ	津野恵美子	11
[AACAA 賞 奨励賞] TSURUMI こどもホスピス	出口 亮	12
AACAA 賞受賞者紹介のつどい 第 1 回開催報告	可児才介	13

■時代の華一輪

「岡本雪子作品展 + 賢」	岡本 賢	14
再会Ⅲ—久しぶりのクラス会展	中野恵美子	15

■会員活動レポート

出会いが始まり	五十嵐通代	16
豊かな空間の中で	加藤恵利	17
タイルと歩んだ人生	森田高年	18
組織としての竣工写真	中平等 穰	20



▶▶ 14

■第 189 回 aaca フォーラム開催報告

「フェーズフリー」という新しい概念	フォーラム委員会	21
-------------------	----------	----

■BOX 展 - 繋ぐ

BOX 展 審査講評	帛屋 正	22
BOX 展 受賞作品		23
BOX 展 応募作品		24
BOX 展に参加して	久常久美子	27



▶▶ 22

■事務局だより	28
---------	----

平成 29 年度 通常総会

●開催日 平成 29 年 6 月 8 日 (木) 午後 5 時 45 分～
●場 所 建築会館大ホール
●議 長 岡本 賢 (会長)
●議事録署名人 高橋圭太郎 (会員)、山崎和子 (会員)
●進 行 立石博巳 (会員・総務委員会副委員長)

●会員総数 376 名 (個人会員 266 名、法人会員 110 名)
●成立定足数 189 名
●出席者 207 名
(出席 80 名、議決権行使書・委任状提出 127 名)

岡本 賢会長 挨拶



皆様 29 年度通常総会に多数お集まり頂き有難うございます。おかげさまで当協会も、会員の皆様が大変活発に活動して頂き、この会の存在が社会的に広く認知されるようになってきたと思っております。AACA 賞もたいへん高い評価を頂くような賞になってまいりました、街に

アート作品を展示するという「街なかミュゼ」活動も、スタート CAM (株)様の大変なご協力を頂き定着しつつあるという感じがし参りました。その他講演会、フォーラム、展覧会に多数の方々がそれらのいろいろな事業にかかわって、多くの方たちに賛同して頂いているという形で、本当に皆様方の活躍の幅が広がってきているということで、大変嬉しく思います。当協会の創立者の芦原先生の考え方の一つに、「社会に開かれた団体であるべきだ。」と聞きました。まさにこの協会は、さまざまな分野の方たちが集まっておりますので、その考え方にふさわしい協会であると考えおりますし、そのために多くの方たちのいわゆる異業種交流ということが活発に行われ、それがこの会員としての意義に繋がっていると考えておりますので、いろいろな事業に参加して是非交流を活発にしていって頂きたい。

本日の総会は 28 年度に行われました色々な事業を総括するということと、決算がメインのテーマになっております。決算は、若干の黒字ということで終わっておりますけれども、こういう団体の性格としては、多大な利益を上げるということではありませぬので、赤字にならない程度の決算ということが一番望ましいのではないかと考えておりますので、その辺を含めまして是非ご審議をよろしくお願いしたいと思います。

来年は 30 周年を迎えます。そのための記念事業としていろいろと企画が準備されております。この 30 周年は芦原義信先生の生誕 100 年ということも絡んでおりますので、是非、芦原先生に絡む色々な事業企画もこの中に取り込んで、芦原義信先生のイメージをこの会が強く持っているということを訴えていければという風に考えております。

いま、武蔵野美術大学では 8 月 13 日まで、「芦原義信建築アーカイブ展」が開催されております、まだ見てらっしゃらない方は、是非ご覧になり、すばらしい図面等が残っておりそれを感じて頂ければと思っております。そういうこともありますので、芦原先生の 100 年を記念する 30 周年ということに盛り上げていただければという風に考えております。

これから始まります 29 年度も色々な事業核があります、会員の皆様方、活発に活動して頂き、この協会というフィールドを使って異業種交流も含めた様々な活動の場にして頂ければ、とゆうことをお願いをいたしまして、私の挨拶とさせていただきます。どうもありがとうございました。

審議

第一号議案・平成 28 年度事業報告に関する件を川瀬専務理事、第二号議案・平成 27 年度 貸借対照表、正味財産増減計算書、財産目録及び収支計算書に関する件を石田理事・事務局長より提案説明があり、また村松監事より 28 年度の会計及び業務について監査報告がなされ、議長採決の結果 第一号・第二号議案は満場一致にて承認された。

第三号議案・長期会費滞納会員の処遇に関する件も提案どおり議長採決により満場一致にて承認された。

第四号議案・平成 27・28 年度理事・監事の選任について議長より提案があり採決により満場一致にて承認された。

以上をもって 29 年度通常総会の審議は滞りなく終了した。

(事業報告・決算報告は、協会ホームページに掲載)

報告

3 月 27 日開催の 28 年度第五回理事会にて決議された。平成 29 年度事業計画・事業予算書について石田理事・事務局長より報告された。

(事業計画・事業予算は、協会ホームページに掲載)

第二回理事会

同日 別室にて 29 年度第二回理事会が開催され、役員の互選が行われ審議決定し、その結果を通常総会会場にて議長より出席者に発表された。(別途記載)

講演

「＜街なかミュゼ＞活動実施報告及び将来展開」について講演があった。

講演者 日本建築美術工芸協会展覧会委員長 平山健雄
スターツCAM株式会社 執行役員 千坂真吾

交流懇親会

岡理事・副会長の乾杯発声により、開催され賑やかに交流・懇親が進んだ。

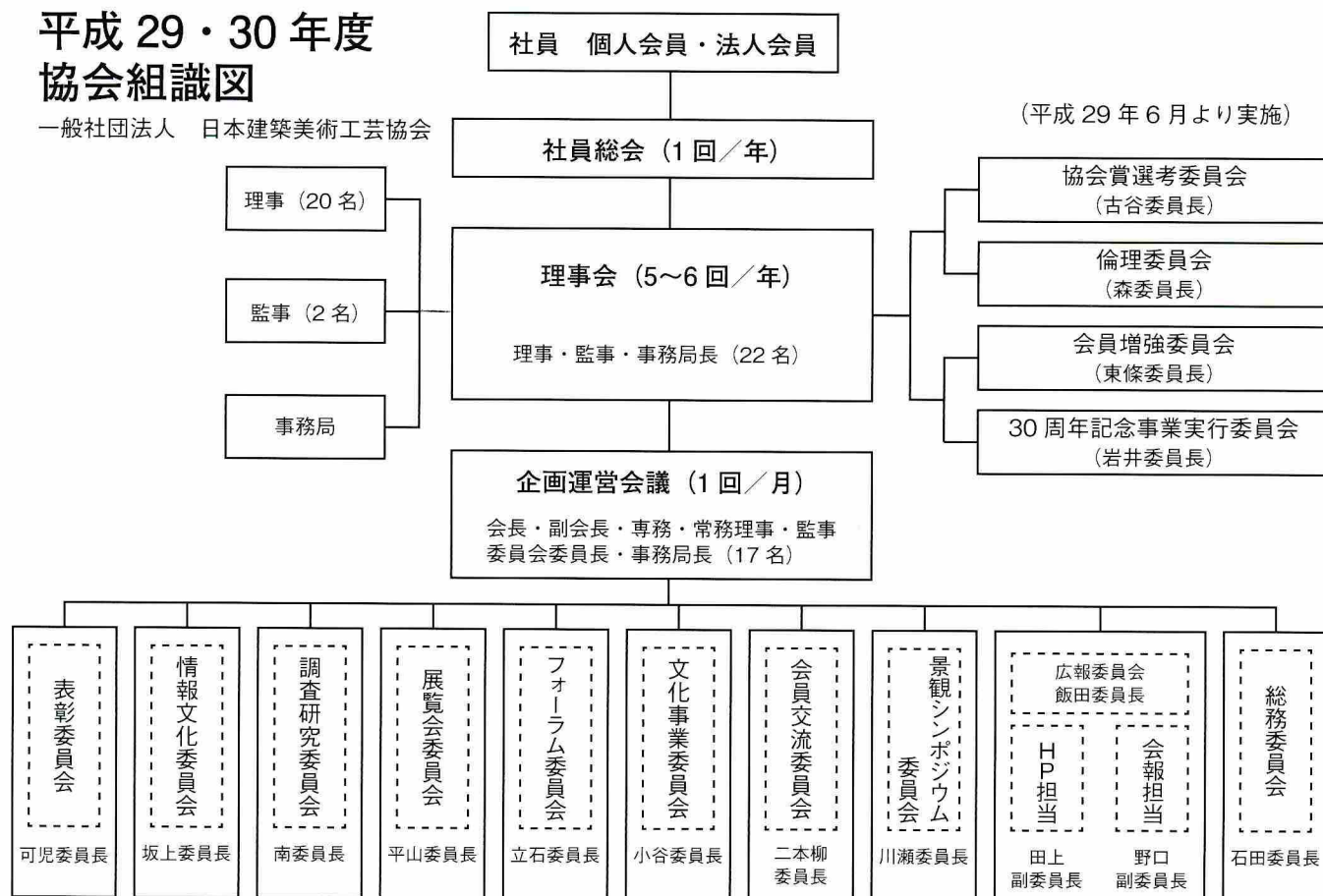
途中新入会員の紹介・予定される事業の案内を挟み東條理事の中締めで終了、散会した。

＜平成29・30年度 協会役員の紹介＞

代表理事（会長）	岡本 賢	建築家
理 事（副会長）	岩井光男	建築家
理 事（副会長）	岡 房信	岡計画事務所
理 事（副会長）	安河内敦子	造形作家
理 事（専 務）	川瀬俊二	(株)粹設計 顧問
理 事（常 務）	大野 勝	(株)佐藤総合計画 取締役
理 事（常 務）	森 暢郎	(株)山下設計 特別顧問
理 事	大成 浩	彫刻家
理 事	尾崎 勝	鹿島建設(株) 専務執行役員 建築設計本部長
理 事	亀井忠夫	(株)日建設計 代表取締役社長
理 事	斎藤公男	建築家 日本大学名誉教授
理 事	芝山哲也	大成建設(株) 常務執行役員
理 事	菅 順二	(株)竹中工務店 常務執行役員
理 事	東條隆郎	建築家
理 事	日置 滋	建築家 東京工業大学副学長
理 事	平山健雄	光ステンド工房代表
理 事	本 耕一	森ビル(株) 顧問
理 事	米林雄一	彫刻家 東京藝術大学名誉教授
理 事	六鹿正治	(株)日本設計取締役会長
理 事	石田真人	事務局長
監 事	森田高年	
監 事	中村弘子	美術家 ケヤキスタジオ代表

平成 29・30 年度 協会組織図

一般社団法人 日本建築美術工芸協会



◎常置委員会

・表彰委員会

委員長 可児才介
副委員長 六鹿正治

・情報文化委員会

委員長 坂上直哉
副委員長 露口典子

・調査研究委員会

委員長 南 三一郎
副委員長 小野寺優元

・景観シンポジウム委員会

委員長 川瀬俊二
副委員長 小谷純造
島本健司、高柳登美

・文化事業委員会

委員長 小谷純造
副委員長 島本健司、堀 剛、
二本柳 敏

・会員交流委員会

委員長 廣角京一
副委員長 青木 崇、白石健二
二本柳 敏

・展覧会委員会

委員長 平山健雄
副委員長 山崎輝子

・フォーラム委員会

委員長 立石博巳
副委員長 齋藤宗弘

・広報委員会

委員長 飯田郷介
副委員長 野口真理 (会報担当)
田上秀司 (HP担当)

・総務委員会

委員長 石田真人
副委員長 立石博巳

◎特別委員会

・協会賞選考委員会

委員長 古谷誠章

・倫理委員会

委員長 森 暢郎

・会員増強委員会

委員長 東條隆郎
副委員長 芝山哲也

・30周年記念事業実行委員会

委員長 岩井光男
副委員長 本多 陽

寄稿

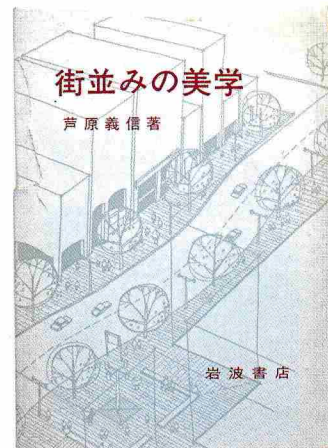
日本建築美術工芸協会創立 30 周年記念と 芦原義信生誕 100 年記念

日本建築美術工芸協会副会長
30 周年記念事業実行委員会委員長

岩井光男

一般社団法人日本建築美術工芸協会は、任意団体として 1968 年に設立された建築美術工業協会が原点となりますが、その 20 年後の 1988 年 11 月 28 日、社団法人日本建築美術工芸協会として現在に続く活動が始まりました。そして、2013 年には公益法人制度改革法によって一般社団法人となり今日に至っております。来年 2018 年（平成 30 年）には法人として創立 30 周年を迎えることになります。「建築に関わる美術、工芸並びにその製作を支える人びとが連携し、交流の場をつくり、社会のニーズに応えるよう文化と芸術性の考究と関連情報の収集・利用を促進する」という理念のもと協会の活動は会員の皆様の熱意とご奉仕によって運営されております。

この協会設立の中核となったのが芦原義信先生です。1988 年に芸術院会員、1990 年に建築学会大賞を受賞、1998 年に文化勲章受章をされた、言うまでもなく日本を代表する建築家であります。ソニービル銀座、国立歴史民俗博物館、東京芸術劇場などの建築作品、『街並みの美学』『空間の設計』『隠れた秩序』などの著作を残し、若い建築家に多くの感動を与えてきました。私が感銘を受けたのは『街並みの美学』でした。戦後の高度経済成長のなかで効率や収益性が優先される建築や街づくりが進む日本にあって都市景観や都市の文化の重要性を示したこの本は、間違いなく名著だと思っています。都心の空間づくりに携わってきた私にとって心の指針となるものでありました。芦原先生は 2003 年 9 月 24 日満 85 歳で他界されましたが、協会設立以来協会の中核として活動に尽力されてきました。先生の人柄に魅了され協会の理念に賛同された人々が集まり協会は今日まで継続されてきたと確信しています。先生は 1918 年 7 月 7 日東京に生まれていますので、来年は生誕 100 年になります。良い機会だと思いますので 2018 年を協会創立 30 周年と先生の生誕 100 年を記念



した特別な年としたいと思います。

現在 30 周年記念事業実行委員会では各委員会の委員長にご出席いただき事業計画を作成しております。AACA 賞、景観シンポジウム、展覧会、フォーラム、セミナー、講演会、会員交流会など例年の協会事業活動を 30 周年記念事業に相応しいテーマと内容にしたいと考えています。AACA 賞については今年度で 27 回目、今では社会的にも認識度は高く受賞の難しい賞になりました。この歴史を振り返り、記録として残すのも意義あることではと考えています。芦原義信生誕 100 年記念については先生の作品見学と先生を語る講演会を計画しています。また記念誌編集委員会による 30 周年の記念誌の作成と発行を計画しております。記念誌は会員皆様のこれまでの協会活動や、aaca について語っていただき、多くの会員が参加する記念誌にしたいと考えています。会員の皆様には積極的に協会活動にご参加をいただき、協会設立 30 周年記念と芦原義信生誕 100 年記念を共に祝いたいと願っております。



ソニービル銀座
(東京都中央区、撮影：飯田郷介)



北澤美術館

(長野県諏訪市、撮影：飯田郷介)

「個と群」アーティストと建築家のコラボレーション

日本建築美術工芸協会会員
景観シンポジウム実行委員長

川瀬俊二



日本建築美術工芸協会では、毎年、春と秋に、景観シンポジウムを開催しています。文字通り、東京を中心とした日本の都市景観にインパクトを与えるプロジェクトや都市景観の未来を展望していく事を主題としています。

2017年3月には、「個と群」－アーティストと建築家のコラボレーション－というタイトルで、アーティストの野老朝雄氏、建築家の宮地弘毅氏に登壇頂きました。野老氏は、2020年のオリンピック・パラリンピックのエンブレムデザインの選考で、見事、当選され、その名前は、一躍、国内外に知れ渡ることとなりました。しかし、後述のように野老氏は建築とアートを繋ぎとめる仕事や研究を長年されて来た方です。そして、一方の宮地氏は三菱地所において、若い頃から丸ビルやペニンシュラ東京など丸の内を代表するプロジェクトを担当され、大名古屋ビルヂングと大手町パークビルディングで野老さんとコラボレーションされました。現在、三菱地所設計の部長として活躍中です。この二つのプロジェクトを軸に、アーティストと建築家に、都市景観を創り上げていくプロセスを語って頂こうと計画を立てたのです。

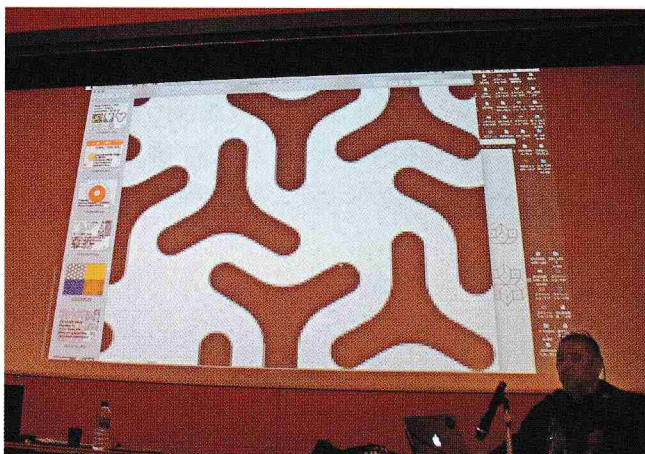
野老氏は東京造形大学で建築学を専攻、その後、ロンドンのAAスクールで、川上喜三郎教授に師事し、建築とデザインを学ばれました。そして、2001年頃からは独学で紋様の研究を始められました。川上喜三郎氏は開成高校から早稲田大学の建築学科に進み、そしてロンドンで設計活動を始め、やがてAAスクールの教授を務め、また一方で彫刻家としても積極的に活動されています。協会の重要な事業の一つに顕彰がありますが、芦原義信賞（新人賞）では、ずっと、川上喜三郎先生にお願いして、先生のアートワークを賞牌として採用させて頂いております。また、野老朝雄氏の父、野老正昭氏（故人）も、かつてaacaの会員であり、建築家と

して活動されていたので、講演をお願いするに当たって、下調べや面談をしていく中で、野老氏が、いかに本会aacaに縁の深い方かを実感した次第です。

これまでaacaのシンポジウムでは、第一部で登壇者にそれぞれ講演頂き、第二部でパネルディスカッションをしていく進行でしたが、登壇者の意向で、今回は、第一部で、宮地氏が自身の建築作品を紹介しながら、次第に野老氏と親交を深め、コラボレーションするきっかけとなるご縁を話され、実現した大名古屋ビルヂングでのコラボレーションでの応答を興味深く紹介、これに野老氏のトークが噛み合わり、大手町パークビルディングでのアートワークも含めて、大変興味深いパネルディスカッションとなりました。

そして、第二部では第一部のパネルディスカッションを受けて、野老氏の「個と群」の講演が始まるという構成になりました。野老氏のMacを操作しながら、様々な紋様をスタディ展開していくプレゼンテーションは会場の参加者をうっとりとした魅惑的なものに魅力的でした。まるで一つの細胞が増殖し、発展、変化していくような楽しさを味わう事が出来たからです。詳しい講演の様子は、記録誌に託したいと思います。

また、今回のシンポジウムの企画を練り、実現させていく時期となりました。会員のみなさんや参加して下さる方々の熱意を糧に、9月のシンポジウムを素晴らしいものにしていきたいと思っています。



（撮影：立石博巳）

aaca 景観シンポジウム「個と群」に参加して

森ビル(株) 設計部
日本建築美術工芸協会法学会員

松田真理子

「個と群 アーティストと建築家のコラボレーション」をテーマとした今回の講演は、三菱地所設計で丸の内の物件を数多く手がけられた宮地弘毅さんを建築サイドに、そして2020年東京オリンピック・パラリンピックのエンブレムをデザインされた野老朝雄さんをアートサイドにお迎えして行われました。建築とアートのコラボレーションに野老さんの「幾何学」という視点が加わったことで、より幅広い議論をお伺いすることができたように思います。

お二人の出会いは2012年竣工のJPタワー、この煙突部分をアート化できないかという依頼でした。ここで野老さんは丸いものの繰り返しに律を適用させることでモアレや波模様を生じさせるという「個と群」の手法で提案が行われています。残念ながらこの提案は実現されませんでした。このプロジェクトでの繋がりがきっかけとなり、続く大名古屋ビルディングや大手町パークビルディングでのコラボレーションが生まれました。大名古屋ビルディング建替プロジェクトにおける依頼は低層部ファサードのガラスデザイン、コンセプトは「クリスタル」でした。ここでの野老さんの提案も正方形を半分に切った45度の三角形という「個」を律のもとで組み合わせた「群」となっており、15度ずつ変形していく全7種類のパターンが徐々に変化していく様子をコマ送りで見ていると錯覚的に水の流れのようなものが感じられ、実際にこの建物を見上げながら歩いて回ってみたいとなりました。室内環境にまで影響を及ぼす外装ファサード、しかも人々の印象に与える影響が特に大きい低層部をアーティストに依頼するという決断には、野老さんに対する宮地さんの厚い信頼が感じられます。宮地さんが仰っていたような「建築家だけでもものを作るのには限界がある、優れた人たちとコラボしながらいいものを作りたい」という建築サイドの強い想いがアーティストの起用につながり、建築の新しい可能性が生まれるのだと実感したエピソードでした。

今年竣工を迎えた大手町パークビルディングでは、緑というキーワードで皇居と大丸有の街を繋いでいくというコンセプトを表現するなかで、緑のリレーの起点となるようなパブリックアートが依頼されました。TOWER OF CONNECTと名付けられたこの作品は、「木」という漢字からイメージされた六角形のピースが回転しながら手をつなぎ合うように接続し、木の幹のような3層の円柱を作り上げています。講演会の後日改めて現場を訪れたのですが、まるで空中から木の成分が析出してこの地に根を張ったような、まさに「起点」を感じさせる力強さを持ったパブリックアートでした。

後半は野老さんの今までの作品やオリンピックエンブレムを中心に「個と群」という手法への挑戦についてお話いただきました。何億通りのパターンからの選択はどう行われているのか、数学者や和算と幾何学の関係、そして近年話題に上ることの多い著作権の問題まで、興味深いお話が幅広く展開し大変勉強になりました。今後デザインと著作権の問題がますます切り離すことができないものとなっていくなかで日本のデザイン界が考えていかなければならない分野に対し、野老さんはオリンピックのエンブレムをもって挑まれており、世間や法律がどう反応するのか期待が高まります。建築出身のアーティストとして「コンパスと三角定規でできる世界」の律を尊重されている野老さんと、野老さんを信頼し建築の顔を任せる建築家宮地さんとの出会いから話が始まり、JPタワーや大名古屋ビルディングでは「建築自体にアートを取り込むコラボレーション」、大手町パークビルディングでは「パブリックアートとしてのコラボレーション」という形で、幾何学スタイリングと建築のコラボレーションの今後の大きな可能性が感じられました。次回の講演会でも建築とアートの新たな融合についてお話を伺えるのを楽しみにしています。



宮地弘毅氏

(撮影：立石博巳)



野老朝雄氏

(撮影：立石博巳)



「TOWER OF CONNECT」

(撮影：飯田郷介)

● AACA 賞 優秀賞

MIZKAN MUSEUM

(株) NTT ファシリティーズ 関西事業本部
E&C 事業部 エンジニアリング部
建築設計部門 建築設計室長
日本建築美術工芸協会法人会員

小川大志



ミツカングループ本社地区再整備プロジェクトの一環で計画された企業博物館である。酢づくりに始まり 200 年以上事業を営み続ける同社創業の地、知多半島の半田市にある当該地区は、運河沿いに黒い下見板貼りの建物が並び、三州瓦による勾配屋根がリズムカルに連なる街並みで知られた美しい景観を有していた。本社地区では、企業活動が地域文化と表裏一体の関係にある一方、すでに生産機能の多くは各地に移転しており、再整備が必然となっていた。

私たちは、地域や企業の存続にとって、保存の為の保存に執着するのではなく、従前の良さを残しながら新しい価値を生み出すことが重要と考え、地区内の建物毎に保存、改修、改築の方針決定を慎重に行った。地区中央に位置する MIZKAN MUSEUM には、歴史的な景観を継承すると同時に次の時代を支える新しい機能とそれにふさわしい空気感を備える建築が求められた。また恵まれた自然と共生し、地域文化の創造・発展に寄与する空間を実現する必要があった。こうして「伝統・革新・環境」の融合をテーマとする施設づくりが行われた。

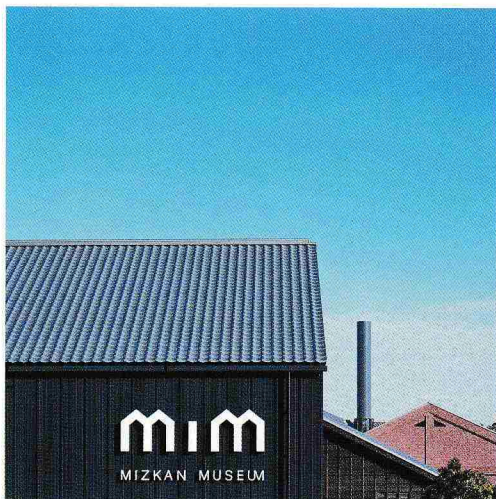
従前の風景を形づくり、見る者に深い印象を与える要素を分析し、屋根勾配やセットバックなどの工夫で街路沿いにおける余白のプロポーションを保ったり、空間に応じて建屋の高さを変化させリズムカルなスカイラインをつくりだしたりするなど、新しいプログラムに際して街並みに違和感を与えない工夫を施した。以前に倣った木と瓦による対岸の建屋に対し、MIZKAN MUSEUM は、耐久性を重視したアルミの外壁といぶし瓦の屋根を組み合わせデザインし、場の印象

を支配するモチーフを丁寧に抽出・再配して歴史と未来を同時に感じさせる雰囲気を出した。またかつての風景にあった煙突を換気装置として新たに設け、建て替え前にはなかった象徴性も付加している。

プラン構成は、従前の工場による街並みの印象を保つべく敢えて外側を閉じ、中庭を現代的で地域に開かれた空間としている。その上で街路沿いや展示空間に内外の接点を柔らかく設け、地域と企業が緩やかに共存する独自の価値観を具現化した。

運河沿いを北上する風や、かつて酢づくりに使われた井戸水、豊かな日照を利用した換気・空調システムなど、半田の環境ポテンシャルを活かす試みもプロジェクトにおける重要な位置付けを占めている。物理的な省エネ効果はもとより、運河沿いの景色を楽しんだ利用者が展示を通じて酢づくりについて学び、水盤の揺らめきや風の流れて感じて、半田の自然や水と共に歩む企業の想いを汲み取り、また普段の生活に戻ること意識の変化を起こすことを期待している。

MIZKAN MUSEUM は多様な価値観を持つ人たちが多く集まり、「伝統・革新・環境」の融合に向かって多くの議論を繰り返しながら実現した施設である。奇抜さを狙うわけではなく、しかし確実にわかりやすいメッセージが伝わるように、まちづくりからディテールまで、一つ一つ課題抽出とその解決を繰り返しながら検討を積み重ねた。その積み重ねが、内外部にわたり、周辺環境と建物、展示物、サインといった様々な要素が互いに引き立て合いながら、歴史と未来を同時に感じさせる「古くて新しいデザイン」を生んだ。多くの来訪者が、以前と変わらない独特の世界観を感じながら、随所で新しい記号を発見し、それらが互いに高め合う印象を持ち帰ることで、歴史ある企業が根付く地域の記憶が未来へと継承されていく。



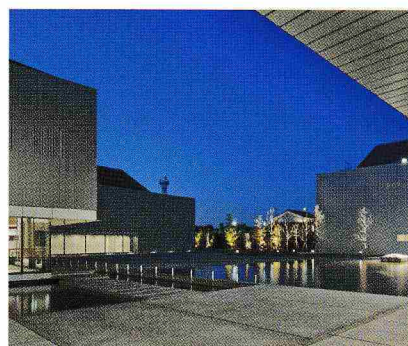
西側外観 多様な価値が響きあう

(撮影：坂野)



渡り廊下 街路より中庭を垣間見る

(撮影：エスエス名古屋支店)



中庭夜景 井戸水を利用した水盤のある空間

(撮影：エスエス名古屋支店)

● AACA 賞 優秀賞

ヤマノイエ

建築家
津野建築設計室代表
日本建築美術工芸協会会員
津野恵美子



～ヤマノイエについて～

この度優秀賞を拝領致しましたヤマノイエは、個人事業家のための別荘です。十数人で泊まり込んで作業をすることもあれば、一人で集中して考えたいこともある。親しい人と少人数でゆったりくつろぐこともしたい。そんな様々なシーンを内包することを求められた住宅です。

初めて敷地を訪れたとき、傾斜地に広がる落葉樹林の美しさが強く印象に残りました。この美しさを囲い取りつつ、いろいろな角度から楽しめるたくさんの居場所を用意することで、要望に応えうる懐の深い空間を作ることができるのではと考えました。

敷地を注意深く調査すると、斜面中央に水の道があって、特に目立つ樹木はそこに沿って生えていることがわかりました。その流れを保存しつつ、中でも一番大きくて美しい樺を中心に、美しい林をそのまま暮らしの中に取り込めるような中庭を作りました。

敷地の外周部は、土から生えた巨石のような厚く粗い黒コンクリートのはつり壁とした一方、中庭側は木製カーテンウォールと縦長の木壁で軽やかな表情として、木々の繊細な枝葉となじむようにしました。

土地が本来持つ流れに沿った作り方は、ランドスケープでも踏襲され、中庭をななめに突っ切るように作られた岩の道は、通常時は散策路として、大雨やプール放水時は水路として計画され、水下の浸透池まで緩やかに水が流れるように導かれています。また、修景に使用した薪、枝、岩、草は、全て工事エリアから出たものを採取、保全しておいたものであり、林の様相が変わってしまわぬよう、生態面でも留意しました。

二つに分けた建築のうち、斜面上部の棟をリビングにあてています。ゆるいコの字型の大きなワンルームで、メインツリーの

樺をゆるく囲いながら、中庭の勾配に合わせて 3m の高さを段々上がっていく構成です。開放的で浮遊感のある中庭側とは対照的に、堅く閉じた外周側にも、ところどころに穿たれた穴のような室を作ること、斜面に埋まり込んで見上げるような関係を感じられる場を作りました。また、見通せないけどつながっていく奥行感を演出するため、薄い梁の連続でできたシンプルなイエ型架構をそのまま露しとして見せ、梁柱が一体となつてできたハイスайдライトからは光や緑を楽しむことができます。

一方、斜面下部に位置する寝室棟は、寝室や駐車場などの小割の機能空間が入っています。傾斜に対してまっすぐ配置することで、地面から 5m 以上浮いた鳥の視点から、斜面に埋まり込んで林を見上げる小動物の視点まで、斜面との関係性にバリエーションを持たせて、それを部屋ごとの特色としています。

場所が持つ小さな特色によって浮かび上がってくる、ちょっとしたコーナーや抜け感。そういったものを積み重ねることが、懐の深い豊かな空間につながると考えて、つくりあげた建築です。



リビング

(撮影：西川公朗)



中庭

(撮影：西川公朗)



寝室

(撮影：西川公朗)

● AACA 賞 奨励賞

TSURUMI こどもホスピス 日本初の「コミュニティ型こどもホスピス」

大成建設株式会社
設計本部 建築設計第五部
プロジェクト・アーキテクト
日本建築美術工芸協会法学会員

出口 亮



不足する難病の子どもと家族への支援

日本には難病を患う子どもが約 15 万人、命にリスクのある子どもは 2 万人いるといわれている。医療の進歩に伴い命が救われる一方、在宅看護の子どもは増加傾向にある。

子どもは遊びや学びの機会が損なわれ、家族の負担は大きく、社会から孤立しがちである。この現状に対する地域・社会からの認知度は低く、社会的サポートが不足していることも課題といえる。入院治療の難病の子どもと家族への支援だけでなく、入院を終えた後、在宅で医療的ケアを行いながら暮らす子どもと家族への支援やそのための施設は不足していると言われている。

日本初「コミュニティ型こどもホスピス」

このような背景から、事業者である「こどものホスピスプロジェクト」と、英国の「ヘレン & ダグラスハウス」との交流からたどり着いた一つのかたちが「コミュニティ型こどもホスピス」である。病院ではなく家であること、地域に根差した自発的な活動であること、友として寄り添うこと、財源を補助金ではなく寄付に頼る慈善活動であること。これらの特徴から、より子どもと家族の多様なニーズに応えられ、心から安心して気兼ね無く集えるコミュニティの場となることが意図されている。

私たち設計者に求められたのは、日本初の「コミュニティ型こどもホスピス」のあるべき姿を描き、それを具現化することだった。

家であるだけでなく、村のような場所

日本に前例のない「コミュニティ型こどもホスピス」の設計にあたり、まずここでの生活のシーンを思い描くことから始めた。ここで過ごす時間の中には楽しいだけでなく辛いときもある。「その時の気持ちに応じて居場所が選べること」「それぞれの居場所が孤立せずに緩やかにつながっていること」が大切なことではないか。

それは、家のようにくつろげる空間であるだけでなく、村のように多様な空間や居場所があり、繋がりのある「いろんな」であふれている場所がふさわしいと考えた。

「いろんな」であふれる場をつくる

TSURUMI こどもホスピスは、6つの家が道によって繋がっている。家には「みんなの部屋」や「おとの部屋」など、様々な特徴をもった部屋があり、道を歩くとわくわくする場面に出会う。家と家の間には小さな溜まりのスペースやいろんな形の庭があり、少し離れて休んだり、時には隠れて泣いたりもできる。内外装の仕上げには木材を多用し、タイルや金属、柔らかいサインなど、優しさや楽しさを大切に計画した。中庭に面した深い軒は夏の日差しを遮り、道の空間には心地よい風が抜け、一年を通じて、ありのままの自然を感じながら安らげる。家を繋ぐ道は、敷地全体へ伸びていき地下鉄駅と住宅街へと繋がる。緩やかなカーブを描く道の合間に描いた「まちの広場」「遊びの丘」といった特徴的な場では、地域子ども達と一緒に遊んだり、季節のイベントを通じて新たな出会いが生まれる。

心を動かす、やさしい風景をめざして

2016 年 4 月大阪に誕生した日本初の「コミュニティ型こどもホスピス」である TSURUMI こどもホスピスは、難病の子どもと家族に個別のサービスを提供するため、寄付によって民間の立場で運営されている。活動を継続していくためには地域・社会の理解と支援が必要である。そのためにも利用する子どもや家族、支援するすべての人の心を動かすやさしい風景となることを目指した。

この風景が社会に広がり、さらなる支援の輪が広がることを、そして第 2・第 3 のコミュニティ型こどもホスピスの道標となることを願っている。



南側外観 6つの家を途の空間がつなぐ



道の空間 中庭に向かう木の梁が連なる



みんなの部屋 登り梁が家を感じさせる

(撮影：鳥村銅一)

AACA 賞受賞者紹介のつどい 第 1 回開催報告

表彰委員会委員長 可児才介
AACA 賞選考委員会副委員長

AACA 賞が設立されてから昨年で 26 回を数えました。

この賞は、都市デザイン、地域デザインからランドスケープ、建築、工芸、絵画、彫刻、環境美術、グラフィック、ディスプレイ、インテリア等のほか、素材やエネルギーの領域に至るまで広範囲にわたる作品を対象としています。毎回すぐれた多くの応募作品が集まり、審査する選考委員会ではいつも難しい判断を迫られます。一般の建築賞や美術賞とは性格を異にしている、建築家、美術家、工芸家をはじめ様々な分野の個人や団体が連携協力して出来上がったものを表彰するのが大きな特徴です。

毎年秋に審査が行われ、AACA 賞、優秀賞、奨励賞、特別賞に加えて将来ある有能な新人を表彰する芦原義信賞等の作品が選ばれます。受賞者には 12 月に行われる当協会の設立記念会において賞牌や賞状が授与されます。一昨年までは受賞者の一部の方に簡単な作品についての説明の機会が与えられていましたが、なかなか受賞作品全体の姿が見えにくく、会員からは作品や作者の講演をやってはどうかという意見も多く聞かれていたところでした。そこで昨年の第 26 回 AACA 賞からは、表彰式での簡単な説明とは別に、独立したイベントにおいて受賞者に受賞作品だけではなく作者の紹介も含めてお話をいただき会員との交流を図る「AACA 賞受賞者紹介のつどい」を開催することになりました。文化事業委員会と表彰委員会の共催で、京橋の AGC スタジオをお借りし 2 回に分けて受賞者の皆様と会員の交流を行います。

第 1 回は去る 4 月 11 日夕方に開催されました。前半では AACA 賞受賞者の中藤泰昭さんをはじめとして、優秀賞の橋口新一郎さん、奨励賞の山田誠一さん、石井大五さん、出

<AACA受賞者紹介のつどい>

- 2017年4月11日（火）
- 場所：AGC Studio
- 主催：（一社）日本建築美術工芸協会
- 受賞者
 - AACA賞「G.Itoya（銀座・伊東屋）」
中藤泰昭（大成建設一級建築士事務所）
 - 優秀賞「織物の茶室～下鴨神社・札の森」
橋口新一郎（建築家・近畿大学建築非常勤講師）
 - 奨励賞「実相寺 毘沙門堂」
山田誠一（山田誠一建築設計事務所）
 - 奨励賞「トイレの家」
石井大五（フューチャースケープ建築設計事務所）
 - 奨励賞「TSURURI こどもホスピス」
片瀬順一（大成建設一級建築士事務所）
出口 亮（大成建設一級建築士事務所）

口亮さんがそれぞれ大変短い制限時間をフルに使って熱いお話をしていただきました。主催者としてはあまりに時間が少なくて申し訳ないと思っていたのですが、皆さんのお話は作品の説明だけではなく、作者の人となりや今までの活動が理解できるような素晴らしい期待以上の内容でした。1 時間余りの講演の後、同じ会場で懇親会を行い、受賞者の皆さんと会員とが親しく交流し、さらなる理解を深めることができたように思います。

第 2 回は 6 月 13 日に同じく AGC スタジオにて開催します。芦原義信賞、優秀賞、特別賞の受賞者の 5 組の皆さんを紹介し、会員の皆さんのふるっでの参加をお願いします。



（撮影：飯田郷介）



（撮影：飯田郷介）

「岡本雪子作品展 + 賢」

日本建築美術工芸協会会長 岡本 賢

2017年3月に銀座の画廊で「岡本雪子作品展 + 賢」の作品展を開催しました。

2015年9月、妻の雪子が突然の病で他界しました。生前の雪子は子供の頃から油絵を学び、学生時代も美術サークルに所属し、私と結婚後も趣味で画家の黒崎俊雄氏に師事し、長い間絵画の世界に親しんできました。

横浜の自宅の傍らに陶芸の窯場を見つけ、それからは陶芸の世界にもなじんできました。絵画と陶芸を結びつけるものとして、絵付けに興味をもち、鎌倉の教室で絵付けを楽しむ事に新たな世界を見出していました。同時に絵画の方では静物画や人物画、風景画という、あくまでも素人の趣味の中で描いていましたが、陶芸の絵付けでは精密画を精魂込めて描くという手法にのめり込んでいました。呉須を用いて丹念に集中力を持続して描く為に、家事を放棄して創作に熱中していました。

同時に描いていた絵画の方は、近年全く違った画風を描く様になり、アクリルペイントを使って抽象画を好んで描く様になりました。大胆な色使いとパレットナイフを使って、陶芸の世界での緻密な作業のストレスを開放しようとする様な作風を展開していました。熱中するあまり、家事も家の中も散々にしていた事もあって、その作品に対して辛辣な批評は

かりを私は投げつけていましたが、振りかえって見るとその作品群はそれなりのレベルに達していた様に思います。

陶器の絵付けは、図柄は古くからあるものの引用が多く、独創性は乏しいと思いますが、その作業は素人の枠を脱している様に見えました。抽象画は全く自由奔放で何のこだわりもなく、ただ感じたままに描いていますが、色彩感覚が良く何かしら清涼感や安心感を得られる様に思います。

それ等の作品をまとめて子供や孫達に伝えておこうと思い、作品集としてまとめる事にしました。友人が銀座の画廊を主宰していて、その作品集を見て作品展を開催したらという話を頂いて、ついでに私のつたない陶芸作品を並べて、絵画と陶器の作品展とする事にしました。会場には多くの友人の方々に来場頂き、生前の雪子の思い出等が語られましたが、多くの方々から雪子がこの様な作品を創作していた事は全く知らなかったという話を聞き、如何に雪子があくまで趣味としての創作で他人に語る事とは考えていなかったという思いを強くしました。

作品展を開催した事を、雪子は彼方で迷惑がっているかもしれませんが、雪子が残した多くの作品群と子供達、孫達の存在が、生きた証として多くの方々に憶えていて頂ける様になったかと思っています。



会場ようす



染付呉須大皿、岡本雪子作



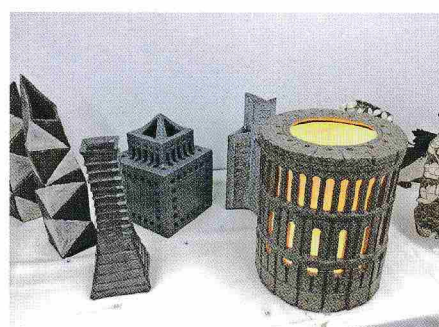
陶作品、岡本賢 作



会場ようす



染付呉須大皿、岡本雪子作



陶作品、岡本賢 作

(撮影：野口真理)

再会Ⅲ—久しぶりのクラス会展

織造形作家
日本建築美術工芸協会会員

中野恵美子

女子美術大学付属高校昭和35年卒業の有志による「再会Ⅲ—久しぶりのクラス会展」を4月10日～15日まで東京交通会館B1のシルバースロンBで行った。これまで人生の節目に再会展を開催してきたが今回は3回目である。第1回展には当時女子美術大学の理事長だった大村智先生がご高覧下さっていたので、今回もご案内をお送りしたところ再びご来場下さった。先生は2015年にノーベル生理学・医学賞を受賞され現在は女子美術大学の名誉理事長となられたが主に女流画家の作品を収集され、山梨県韭崎市に美術館を建設された。美術への関心の深い先生に再度のご高覧をいただき、制作を継続し仲間と発表することへの応援と一同励まされた。

思い起せば、女子美付属の同級生であり共にaaca会員の山崎輝子さんと筆者が40年前、日本現代工芸美術展会場の拙作の前で再会し、それから作品と共に交流が始まった。

その後、他の同級生も集まりデパートで小品展などを行ってきたが還暦の記念に「再会展」を開催する企画を立てたのが第1回目となった。19名参加の同展では会場を訪れる懐かしい旧友との再会にタイムスリップしたかのような時間を過ごしたことが今でも忘れられない。会場に入ってきた人の顔を確かめるようにじっと見、突如「ウワーッ！ 何々さん？」と声をあげ、久しぶりの出会いに歓喜したものであった。旧姓、ニックネームが飛び交い友達の友達が繋がり気分は高校時代そのものに戻っていた。古希の2回目も19名の参加で行ったが、その後時を経て制作することをやめた方、亡くなった方もおり元気なうちにということになり次の節目の喜寿にはまだ間があったがこの度の3回展を開催した。参加者は10名であったが前回同様賑やかに盛会裡に終わった。

高校時代は時代的背景もあるが将来の職業をことさら意識

することもなく、皆、ただ夢中になってキャンパスに向かいお互いの作風に「あなたらしいわね」等々と無邪気に作品の感想を述べ合っていた。高校卒業後4年制または短大への進学、就職する者と進路が分かれた。そして結婚、出産とそれぞれの生活に追われていたが、落ち着いてから久しぶりに会ってみると何らかの形で美術に携わっている。隣のクラスも含めると日展、日本伝統工芸展、国展、日本クラフトデザイン協会、女流画家展、墨優会等の会員、女優、写真家、靴のデザイナー、大学で教える者もいた。趣味で染色、陶芸、水彩、墨画を嗜む者もいて実に多彩で生き生きしている。

「あなたらしい」世界をベースに各自がそれぞれ成長し素晴らしい世界を築いている現在であり、幼い頃に好きなものに出会い、それと向き合いながら人生を過ごしてきた証である。そのこと自体が有り難いことでそれぞれ好きな道に進ませてくれた親にそして、継続することを応援してくれた家族、友人に感謝するばかりである。



大村先生と出品者

(撮影：中野恵美子)



展覧会のように

(撮影：中野恵美子)



展覧会のように

(撮影：中野恵美子)

会員活動レポート

出合いが始まり

新制作協会会員
日本建築美術工芸協会会員

五十嵐通代



私は学生時代に機織りに憧れて、染織を勉強し始めました。その頃は『身につけるものを織る』という工芸的なことを考えていました。

糸を染めて機にかけ、マフラーや着尺などを織りましたが、結婚と共に30年近く機に触ることも無くなっておりました。

今の自分に出来ることは？と考えた時に、若い時学んだ織があることに気づき、まず織り機を購入しました。何からはじめようかと考えていた時に学生の時に書いた古いノートを見つけ、読み返していると、堀内紀子先生の特別講義が記録されており『何をして良いかわからない時はまず手を動かさない、一心に手を動かしているうちに何か生まれてきます』と書いた一文を発見しました。まさに、その時の私に一番必要な言葉でした。30年見ていなかったノートが私を導いてくれました。『自分の好きなものを好きなように織って見よう』が制作を再開した私の出発点です。身に付ける事にこだわらなければ、素材選びも自由になり、硬いもの、透けるもの、伸びるもの、痛いもの、重いもの、何でも試してみよう、素材にかかわらず実験しようとそのからのスタートでした。

機械織りでは出来ない手織りによる表現を探してみようと思い、裂織り絡み織り（奈良時代、正倉院の収蔵物にもある技法で現代でも夏物の着物に使われている紗とか羅の伝統的な技法）の技法をしばらく行いました。独自で一年余り制作していましたが、これで良いのだろうかと思い神奈川県展に出品したところ、思いがけず賞を頂き、続けていこうと思いました。その時に知り合った方から、東京テキスタイル研究所（残念なことに現在は閉鎖されましたが、前身は京都

の川島織物の東京校）を紹介されました。東京テキスタイル研究所に通うこととなり、素晴らしい講師の方々と出会い、造形でも立体的な織りをしたいとなりステンレス線と糸を使った制作を始めました。

テーマは『自分の中に潜んでいる自分でも自由になら無いもの』細胞とか、肉体を作っているものなどに惹かれていました。織物は壁面から掛けることが多い自立しないものですが、ステンレス線を使ってからは、徐々に作品が半立体になっていきました。次第に絡み織りからも離れて、糸の流れで表現するようになりました。そして半立体が自立していき小さい立体にもなりました。

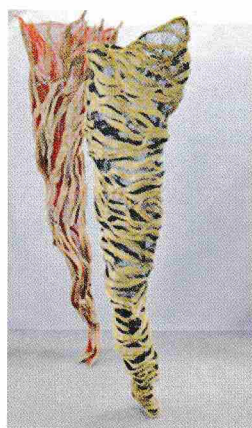
その頃また、和紙との出合いがあり、紙は、ペーパーテキスタイルといいテキスタイルの仲間ですが縦糸と横糸の縛りから解放された様に感じられ自己流の紙漉きで面白い発見を探している途中です。毎年出品していた新制作展で作り手として育てて頂いた気がします。これまでは制作した作品を発表することしか考えていませんでしたが、日本建築美術工芸協会の会員の方からお誘いを受け『街に飛び出す作品展』に出品する事が出来、遅ればせながら、その流れに気づかされ、作り手としてだけでなく、見ていただくことを意識する良いチャンスに巡り会えたと思っています。日本建築美術工芸協会で出会えた各分野の皆様からの素晴らしい刺激に感謝いたします。



「ウォーターフォール」 200 × 120



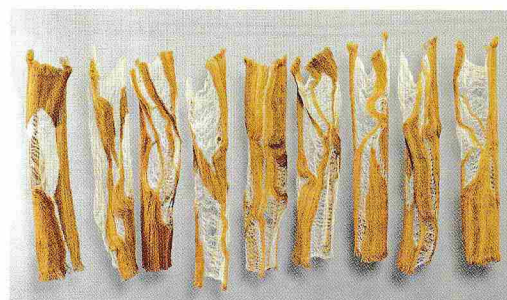
「見えているのに見えないもの」 110 × 350



「群れる」 250 × 320



「夜の音」 90 × 180



「たわ・たわ・」 200 × 120

(単位：センチメートル)

豊かな空間の中で

美術家
日本建築美術工芸協会会員

加藤恵利



今回、aacaのご協力のもと、岡崎信用金庫井田支店にてモニュメントを設置する運びとなりました。多くの方々のご支援、ご協力に深く感謝申し上げます。作品制作に当たってはaaca 法人会員菊川工業株式会社のご協力によるもので、大変有難く心より感謝いたします。

作品「Bloom- 芽吹く -」は、2014年のギャラリーでの個展から始まり、寺院、農村舞台など様々な場所で展示をさせていただきました。私達の心に芽生えた希望や想いが、人と人とを繋ぐ時、またそこから別の何かが芽吹いていく。そして、観る人が少しでも楽しい気持ちになってくれたらという想いを込めて作りました。

私は作品そのものよりもむしろそれを取り巻く周りの空間を感じ、それを活かすために作品をつくる、といっても過言ではありません。私の作品は、見えない部分や空間が息づき、観る人の想像力や身体性を引き出す装置だと思っています。それらは、私が育った古い家の記憶から来ています。子供の頃、よく同じ所で躓いたり、急な階段を登るのに手足を使ったり、段差によっては他よりたくさん足を上げたり。また、

目には見えないけれどその場所の匂い、湿気、音などを感じたり。習慣化された生活の中で、身体がそれぞれの感覚を次第に覚えていく。私の空間認識は、そうした経験の中で体得していったような気がします。

そういった空間認識を明確に打ち出したのが、最近の制作テーマとしている「すきま」という作品です。二つのモノをどんなにくっつけようとしても「すきま」は自然にできてしまいます。それどころか、「すきま」を埋めようとすればするほど、かえって「すきま」は増えるばかりです。「すきま」は無駄な空間かもしれません。しかし、私にとっては、無駄ではありません。「すきま」は、モノとモノとの相対的な関係から成り立っており、それら二つを活かすために存在しているのです。何も無いところからは生まれません。「すきま」と「すきま」を重ねるうちに、また「すきま」ができ、どんどん増え、もはやどこが「すきま」でどこが「すきま」でないのか、わからなくなる。空っぽであるはずの「すきま」が新たに空間を作り、観る人の想像力を刺激し、あるいはその可能性を広げていく。そんな作品です。

様々な記憶の断片から作品を作る。作品自体はフィクションかもしれませんが、そこにリアリティを感じさせるもの。作品が、その場所から生えているかのように。既成概念や言葉に頼らない、心の深い部分で感じる事ができるもの。そして、創造の世界をもっともっともっと自由に楽しむ事が出来るような、そういう作品を作っていきたいと思います。



「Bloom - 芽吹く -」 2015
(名古屋市民ギャラリー矢田・名古屋)
(撮影：山口幸一)



「Bloom - 芽吹く -」 農村舞台アートプロジェクト 2015(豊田市旭八幡神社・愛知)
(撮影：井上貴雄)



「原点回帰」 2016 (長久手文化の家・愛知)
(撮影者：山口幸一)



「Bloom - 芽吹く -」 岡崎信金設置作品
(撮影：加藤恵利)



「すきま2」 2017
(ハートフィールドギャラリー・名古屋)
(撮影：山口幸一)

タイルと歩んだ人生

日本建築美術工芸協会会員 森田高年

私がこの3月まで所属していた「不二窯業株式会社」について、その生立ち、何をやっている会社でその実績は、また当社と関係の深い前川國男建築設計事務所（現・前川建築設計事務所）との関わりなどを簡単に紹介します。

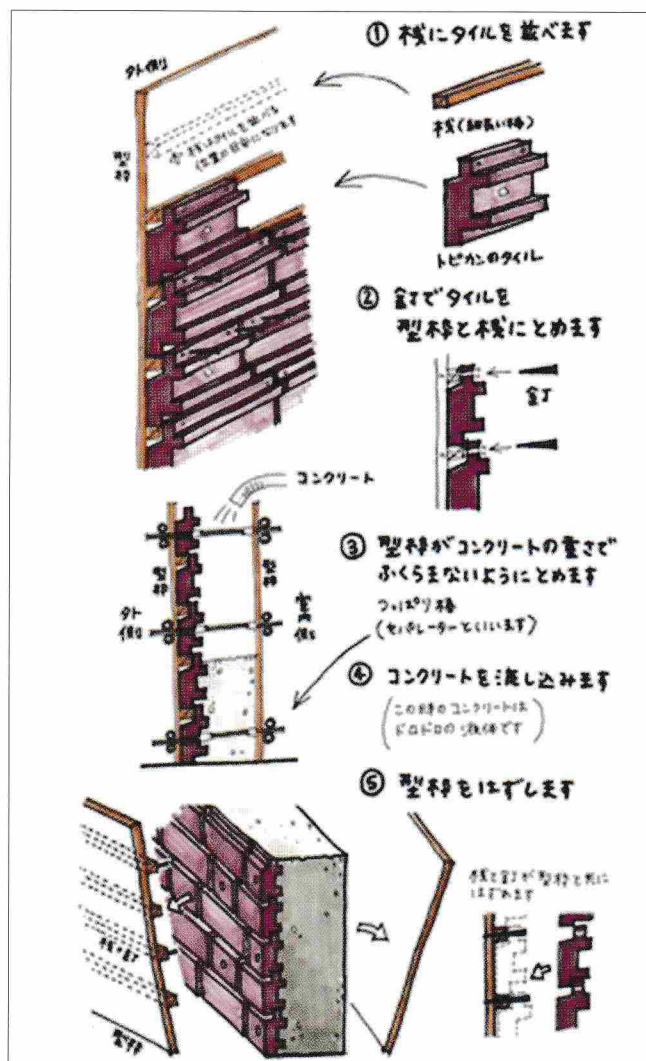
昭和8年4月に東京市京橋区新富町3丁目に設立された「昭和タイル商会」が前身で、その後改組される形で昭和17年1月に「有限会社松嶋窯業化工」が設立され、更に終戦の翌年の昭和21年7月に「不二窯業株式会社」と改組され今日に至っています。

当時の代表的な仕事としては昭和24年「慶應義塾大学学生ホール内部タイル工事」、昭和29年「森永製菓本社増改築内外装タイル工事」、昭和29年「神奈川県立図書館外装テラコッタブロック工事」などがあり、何れも大型のビル工事をメインにしており、これは現在においても同様です。昭和30年代にはいと札幌五番館、弘前市庁舎、東北電力ビル、新潟東映ホテル、横浜市庁舎、川崎市庁舎、東京文化会館、国会図書館本館、新宿厚生年金会館、岡山県庁舎、香川県庁舎、京都会館、そして全国各地の多くの電報電話局など全国に広がっていました。

タイル施工業者として全国展開をしているのは当社一社のみで、昭和32年に大阪営業所、昭和33年に札幌営業所、昭和41年に仙台営業所、昭和43年に福岡営業所、昭和48年に北関東営業所、昭和58年に新潟営業所、平成9年に横浜営業所を開設しています。これは大阪・札幌営業所開設前後に日本電信電話公社の電信電話局の仕事がかなりあり、東京からの出張では賄えきれなくなったことが大きな要因でした。昭和40年代に入ると弊社と前川國男建築設計事務所と共同で開発した「壁体打込ブリック工法」が前川國男建築設計事務所のみならず、日本電信電話公社に採用され、他の設計事務所にも多く採用されたことで更に仙台、北関東、新潟営業所開設へと繋がっていきました。

さて、不二窯業と前川國男建築設計事務所との繋がりは、昭和29年に八重洲に立てた新社屋（創業当時は新富町）の2階に前川國男建築設計事務所の一部の方たちが移ってきたことでより緊密になってきたようです。しかし、そもそものきっかけは、残念ながら分かりません。

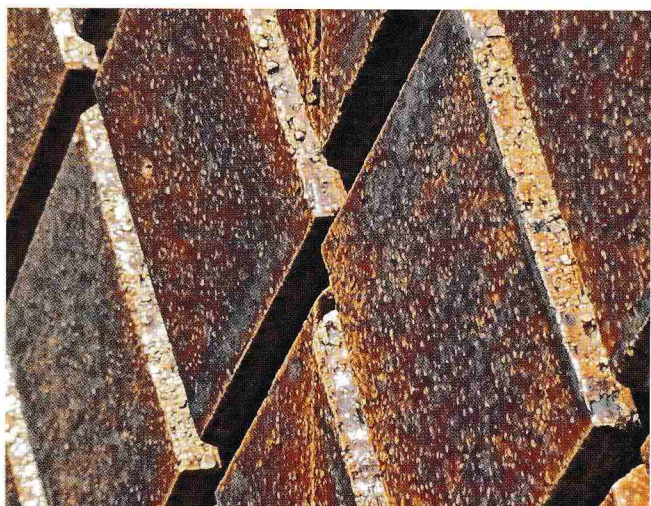
不二窯業がサブコンとしてその確固たる地位を築く契機となった「打込用壁体ブリック」は、前川事務所と共同開発した、従前のコンクリート壁にモルタルで張り付けるのではなく、型枠に仮止めしたブリックにコンクリートを流し込み一体化させ、剥離を起こさないようにするという画



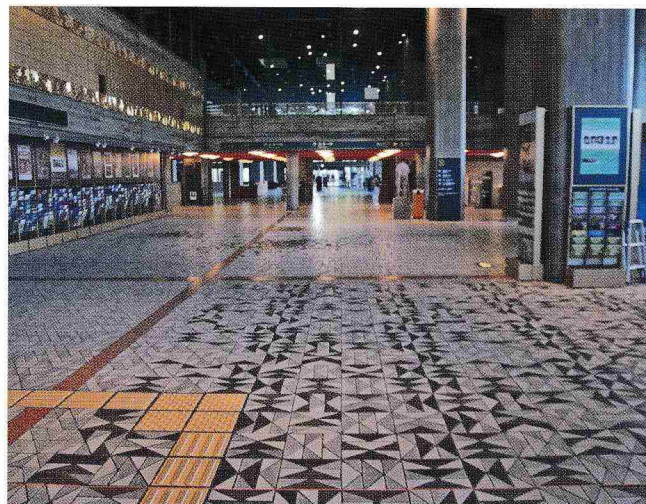
壁体打込ブリック工法説明図
2013© 東京都美術館×東京藝術大学
とびらプロジェクト design: Asako Suzuki



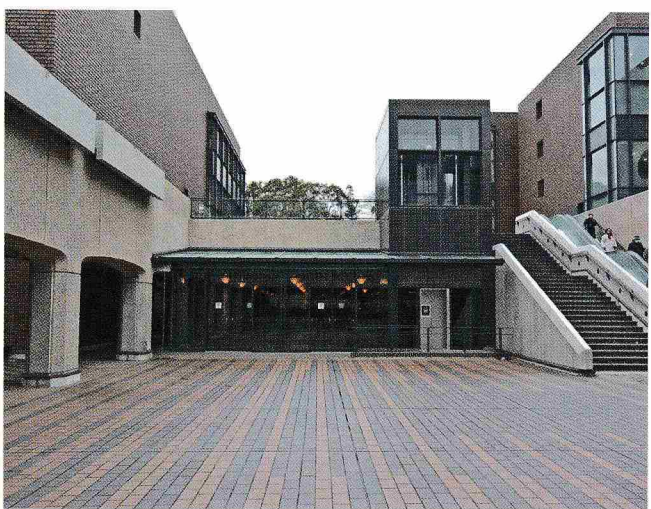
熊本県立美術館



福岡市美術館 PC 版打ち込みタイル



東京文化会館



東京都美術館



三菱一号館最初のレンガ積

期的な特許でした。これが開発されたことによりコンクリート打放しが年月を重ねると醜くなっていく事がなくなり、昭和鋼機の耐候性コールテン鋼サッシュ、湊建材のプレキャストコンクリート、そして打込ブリックの不二窯業という三羽ガラスが出来上がったのです。ただ、残念なことには、この3社のうち、現在も当時と変わらず業務を続けているのは不二窯業だけになってしまいました。

当社も業務としては新たに開発したタイルの乾式工法（クリップロックオン工法）、外断熱レンガ積工法、レンガの乾式工法も開発し、多様なニーズにこたえるべく日々技術開発に邁進しております。更に、改修工法のFST工法も歴史的建造物の補修・改修に多く使われるようになっております。また、駅前等の公共空間のデザイン・管理・施工等も

行い（金属、ガラスが主ですが）多様化も図っております。

aacaの広報誌ですので関連した建物では建築家・芦原義信（aaca設立者）の千葉県佐倉市にある「国立歴史民俗博物館」、長野県諏訪市にある「北澤美術館」、その隣にある「ホテル紅や」があります。そして岡本現会長が関わられた「八王子市庁舎」、「恵比寿ガーデンプレイス」などがあります。

組織としての竣工写真

株式会社エスエス 中平等 穰
日本建築美術工芸協会法人会員

会社の歴史

エスエスは昭和 35 年に SS 現像所として富山で創業しました。昭和 40 年には名古屋で株式会社エスエス現像所という名で企業組織としてのスタートをしています。当時から竣工写真に特化しており、建築業界の発展とともに企業規模も成長してまいりました。

昭和 43 年には大阪万博を迎え活況にあった大阪へ進出し、その 5 年後には東京にも事務所を出しました。後に福岡と仙台にも拠点を広げ、全国組織の竣工写真の会社となり今に至っております。

現在ではシェアの高さでは及ばないものの売上額では東京が大阪・名古屋を大きく離し、全体の半分を占めております。今後も暫くは日本の経済の動向とともに東京シフトが進んでいくものと思われます。

比較的規模が大きめの活動をしております東京・大阪・名古屋では営業と撮影を分業化しております。きめ細かい対応ができるメリットはありますが、設計者との関わりも大きい仕事ですので撮影者が窓口となる場合もあり顧客のニーズに合わせて臨機応変な対応を心がけております。

竣工写真業界を襲ったバブル崩壊とデジタル化の波

建築業界と共に順調に発展を続けていた竣工写真の業界は平成に入るとバブル崩壊により縮小へと向かい始めました。後のリーマンショックなど幾つもの危機的な時期があり、事務所を閉じる同業者も少なくありませんでした。

同時に従来のフィルム撮影からデジタル撮影に変わった事にも大きな影響を受けました。

データ納品が当たり前となった分、従来の様な写真プリントとアルバムの発注は激減しました。

弊社はこの変化への対応として、施主向けの写真データ管理システムの提供、画像修正処理、早い時期からの竣工アル

バムのフォトアルバム化など、次の時代への商品を提案してまいりました。

現在は、建築業界は好況な状況となっておりますが、オリンピック後の経済変化に備えて絶えず新たな提案のできる体制を目指していきたいと思っております。

従来の報告用の写真としての存在では無くなった竣工写真

デジタル撮影が当たり前となった現在、竣工写真は建物完成後もいろいろな場で使用されるようになりました。どちらかと言えば竣工写真アルバムの提出というより、その後の利用に重点を置いている方が多いと感じます。

賑わいの創出を演出するために撮影時期を敢えて引渡し後に行い、人を入れた撮影をする事はもう当たり前になっております。

撮影する側も画一的な撮影ではなくニーズに合わせた対応、または提案する力が必要になっております。

歴史に携わる仕事

弊社は竣工写真の業界内では、かつては組織同士の繋がりという特徴が強かったのですが、今は顧客と個人対個人でも繋がるようになってきております。

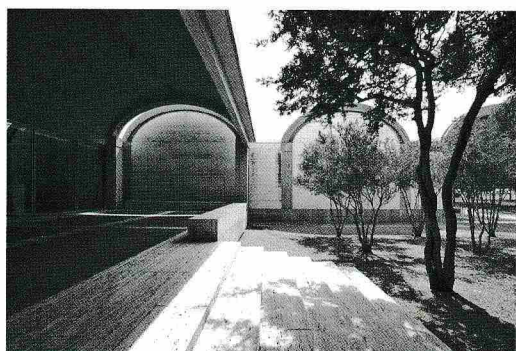
弊社のカメラマンを指定して頂ける顧客も多くなってきており、大変感謝しております。

デジタル化によってある程度の事は誰でも出来てしまう世の中になりましたが、どうしても人間でなければダメな部分はまだまだあります。

弊社の業務もまさに、その重要な部分を持ち備えている事に幸せを感じます。

たくさんの人の知恵が集まって完成した建築物を後世まで残す重要な役割の一端を担う企業として社員全員が誇りを持って業務に携わっております。

これからも建築業界、日本建築美術工芸協会の皆様とともに発展していきたいと思っております。



「キンベル美術館」S.N

(撮影者： 島尾 望)



「リスボン万博 ポルトガル館」S.N.

(撮影者： 島尾 望)



早稲田大学キャンパス 3 号館

(撮影：東京支店 走出直道)

「フェーズフリー」という新しい概念

フォーラム委員会

第 189 回 aaca フォーラムは 3 月 29 日建築会館で、防災に関わる新しい概念「PhaseFree」(フェーズフリー)について、スペラディウス株式会社代表取締役・佐藤唯行氏にお話をいただいた。

フェーズフリーとは、これまで人類が解決できなかった繰り返し発生する災害に対して、災害時の特別な防災という考え方ではなく、平常時や災害時などの社会の状況に関わらず、適切な生活の質を確保しようという新しい概念である。

佐藤氏は学生時代に大学で災害軽減(防災)工学を研究する中で奥尻島地震(1993 年)、阪神・淡路大震災(1995 年)に直面し現地に入ったが、自分の無力さと同時に防災を行政やボランティア活動によって実現しようとする現状への限界も痛感し、「防災はビジネスによって実現されるべきなのは」との思いが芽生えたという。そして平常時と災害時という二つのフェーズ(状態=垣根)の区切りをやめ、フェーズフリーという概念で普段の生活がそのまま防災になるようなモノやサービスが作れないかと考えるようになった。つまり防災時には普段とは違う方法で役立ったり、生活や命を守れること。それがフェーズフリーという価値である。

フェーズフリーがいわゆる防災と異なる点は、あらゆるモノやサービスに関わる企業や個人が全員主役であることであり、これまで防災について考える役目は防災の専門家が多くの担ってきたが、フェーズフリーではモノやサービスを提案・提供する全ての人がそれぞれの専門性の中でフェーズフリーという付加価値を加え、新たにデザインし改善して提供することで、災害時でも安心して豊かな暮らしができる社会へ近づくと述べる。

フェーズフリーはどのような状況においても利用できること。日常から使える日常の感性に合っていること。使い方、使用限界、利用限界がわかりやすいこと。気づき、意識し、災害に対するイメージを生むこと。参加でき広めたりできること。と定義している。そしてカテゴリーとしてはモノを軸にした〈プロダクト分野〉と、コトを軸にした〈サービス分野〉に分類している。

佐藤氏の説明によると、例えば、

A. 防災及び特定の職業などで日常的に利用しているものでは
〈プロダクト分野〉日常時から工事や作業現場などで利用され防災グッズとしても活用されるヘルメット

〈サービス分野〉常に守るという役目を担っているガードマン

B. 利用方法を提案することでフェーズフリーの価値を提供する点では

〈プロダクト分野〉ペットボトルウォーター

〈サービス分野〉日常時から災害への知識・理解を深める教育を取り入れ対応力を向上

C. 日常時も非常時も同じフェーズフリーの価値を提供し続けるという面では

〈プロダクト分野〉水に強いペン

〈サービス分野〉日常の利便性に加え非常時にも物資を確保できる宅配サービス

D. 日常時とは別に災害時に役立つフェーズフリーの価値を発揮する場面

〈プロダクト分野〉日常時は省エネでエコ、非常時には生活用の電源に利用できる PHV 車(プラグインハイブリッド車)

〈サービス分野〉日常時には健康管理、非常時にはペットの避難先として利用できる動物病院

以上を見てくるとフェーズフリーという言葉は耳慣れないが、内容は日常の中で意識し見直すことで取り組みそうである。日常生活の中でもタンスなどを固定したり、階段の上の飾り棚に重いものを置かないなどの配慮はしている。上記に水に強いペンとあるが、超撥水性の風呂敷は水を運ぶのに使えそうである。そのように考えると学生に課題として提出できるなと思った。そのことで若い人も防災について身近なものとして捉えるようになるだろう。また日常の食品も特別に災害用というのではなく保存可能なものを常備すればよさそう。保存を考慮した日本食を見直すのもよいかもしれない。日常の中での防災について考えるよい機会となった。



フォーラムのようす

(撮影: 飯田郷介)

日本建築美術工芸協会会員
展覧会委員会選考委員長

帛屋 正

「繋ぐ」をテーマに、30cm 立方という限られた空間の中での表現による展覧会。

建築設計、各種素材メーカー、美術工芸作家、学生、その他あらゆるジャンルの人達が普段関わる事のない人達と出会い、刺激し合う事で繋がりを持つきっかけになることを期待しました。38 名 40 点の参加がありました。

BOX展 審査選考について

審 査 日：2017年4月10日（月） 午後2時より

終了午後4時30分

応募作品：40点※1回目にしてはまずまずの作品の数・内容・魅力

審査委員：帛屋 正（選考委員長）山際裕史 村井久美
伊藤 愛 中村茂幸

審査経過：審査委員には一切出品作家の名前は伏せて行われた。

第1回目の投票：全作品の40点の中から6点を各審査員記入。開始後1時間の3時に集計。計18点がリストアップ。この中に1票の作品が13点あり、審査委員の話し合いで精査し、計9点残る。因みに3点以上獲得の作品が3点あった。第2回目の投票：9点の作品の中から1人3点選ぶ。この結果6点が残った。尚、満票の作品が1点あり、この作品について話し合いがあり、文句なしに最優秀賞に推挙された。3票獲得の作品が2点あり異議なく優秀賞に選ばれた。佳作には3作品票を獲得したものがあり、佳作賞とした。賞が決定し、始めて受賞者のプロフィールが審査委員に示され最優秀賞に選ばれた久常久美子さんについては審査委員も係の人知らない方であり、作品は非常に新鮮なものであり見れば見る程に魅力的な作品であった。作家の現実の体験を基に作られたものであり、見る人に何かを語りかけてくるようで素晴らしい作品であった。また作家の熟年齢を感じさせない生き生きとした作品であることも書き添えておく。

審査委員の感想：30cm立法の空間をどのようにとらえるかという点において審査委員の意表を突き驚かすような作品が現れなかったことは残念であったと審査員全員から異口同音に発せられた。

BOX=30cm立法をどう解釈し、何をどう表現するかが問われたコンペティションであったが、審査員一堂に自分を



会場風景



驚かすような作品がなかったことに一抹の不満があった。BOXの中にあるものが飛び出そうとするのか、はみ出すのか、また縮まって消えようとするのか、はたまた得体のしれない微妙に動くものとか、見る人を不安に陥れるのか等々いろいろな考えがあるだろう。アーティストは常に自分と向き合い楽しいもの、気持ちの良くなるようなもの、何かとも言えないものとかを想像しないのだろうかと思ってしまった。

日頃、作家が制作・試行する活動の域を超えて敢て新しいことにチャレンジしてほしかったと思う。

最優秀賞 久常久美子（一般）
「再生」

優 秀 賞 新實広記（会員）
「Vesel ベッセル」

大河内久子（会員）
「風の通り道」

佳 作 (株)フィールドフォー・デザインオフィス 榊竜太（会員）
「うち-そと」

田中ショウ（会員）
「太陽の職人（スカラベ）」

小野寺恵美（会員）
「段を持つ箱一誘う土」

● 最優秀賞



久常久美子（一般） 再生

ワイヤー、綿糸、綿布、原毛

突発的な事故で感じたこと。前方から歩いて来た人と腕が触れ、転びそうになった時、相手方が手をさし出して下さり、転倒せずにすんだ。一瞬、何がおこったか。

腕から出血しおどろき、眼で捉えた感情を眼球と網膜側に表現しました。その後治療の結果も良く、再生能力のある皮膚に感謝している。

● 優秀賞



新實広記（会員） Vessel

ガラス

ガラスの起源を語るときに引き合いに出されるのがプリニウスによる「博物誌」の中の話です。紀元前数千年前に「ひとりの船乗りが東地中海の海岸で炊事をするのに炉を築こうとして、船荷の炭酸ソーダの塊を用いたところ、炉の熱によってソーダの塊と海岸の白砂が偶然混ざり合って溶解し、世界で最初のガラスが誕生した。」この説が事実かどうかは誰も知ることはできませんが、私はそんな船乗りの初めてガラスを目にしたその瞬間を想像しながら作品制作をしています。

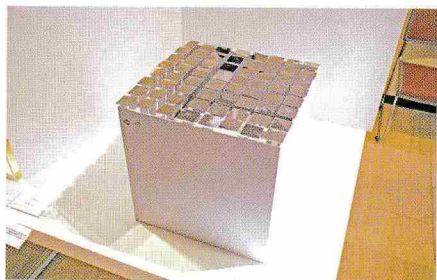


大河内久子（会員） 風の通り道

ステンレス

ステンレスのキリッとした素材感で、風の通り抜ける空間を感じてほしいです。

● 佳作



株式会社フィールドフォー・デザインオフィス（会員）

うちーそと

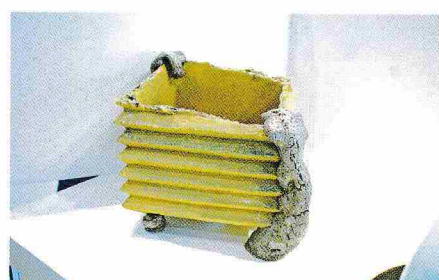
フィールドフォー・デザインオフィスは、インテリアとランドスケープとが密度の高い連携をして、建築の内外をシームレスに“繋ぎ”ます。当展では、それによって創造される豊かな環境空間を、ひとつの箱を使い表現しました。



田中ショウ（会員） 太陽の職人（スカラベ）

大理石

古代エジプトで太陽神と同一視されていたというスカラベ。太陽とまでは言わなくても、何か大切なものをひたむきに、孤独に、様々な困難を乗り越えて糞を転がす姿は、どこか職人仕事を連想させる。



小野寺恵美（会員） 段を持つ箱 - 誘う土 -

陶土

四角い箱は壁を持つ事で底を覗き込むと不思議な世界が広がっている様に見える。外側からの印象とは異なるその空間を、外へいざなうのか、内へと誘うのか一繋げようとする土塊は銀彩を施して対角に配した。段がある外観の固いイメージや、軽やかに内側に入りこもうとする柔らかな形状の様に、土の多彩な表情でテーマを表現した。

BOX 展応募作品



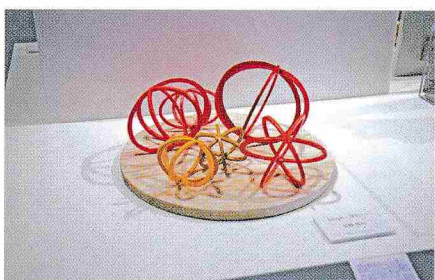
吉田佑子（会員） 沓（ホウ）
木、絵具、アクリル、紙、糸など



大谷美智子（一般） 千本占地（センボンシメジ）
生糸、テグス、タイシルク



深尾雅子（一般） 連綿と - Without A Pause
紙管、ゴム



加藤恵利（会員） Bloom - 芽吹く -
木材、アクリル、ニス



五十嵐通代（会員） To move
和紙、ステンレス



松岡明子（一般） 貴きもの（トオキモノ）
糸（絹、ウール、綿、麻）、銅線、真ちゅう線



渡辺雅子（会員） 連鎖
ミクストメディア



田中 毅（一般） 化石のまなこ



白野順子（会員） 北欧の想い - オーロラ
シルク染色



谷口千恵子（会員） 透ける・受けるかたち
グラフィート（フレスコ）、ガラス



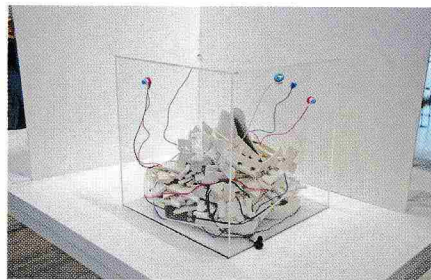
星 素子（会員） DO! PUBLIC 素ことば（モトコトバ）
段ボール、アクリル



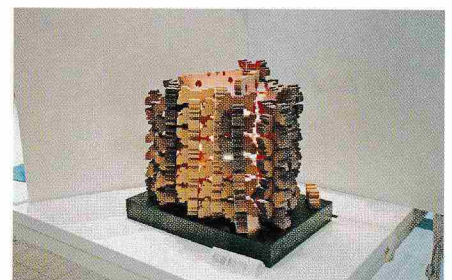
椎橋文子（一般） バンドラの箱から
木、羊皮紙、金箔



野口真理 (会員) そらの窓
陶、粉漆、金属箔



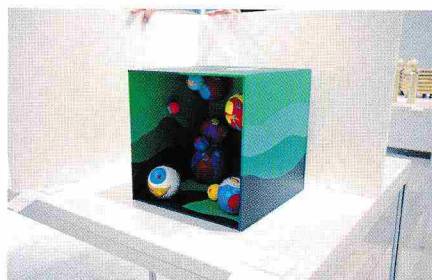
吉田 実 (会員) 聴える???
セラミック、イヤホンなど



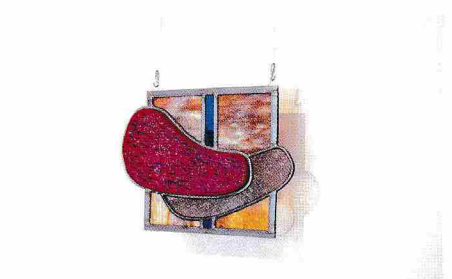
常松欽治 (一般) 霊園灯 (ようえんとう)
セ器質



山崎和子 (会員) Time - A Time - B
布



犬飼三千子 (会員) 木精っ子 (こだまっこ)
布、紙、発泡スチロール



安河内敦子 (会員) 浮遊する影
スタンドグラス、漆



神 まさこ (会員) 無題
陶器



平山健雄 (会員) 光を紡ぐ
ガラス



山崎輝子 (会員) 遠き島より (seeds)
皮革、木



中村弘子 (会員) 春
ガラス



鍵井保秀 (会員) Something we need (何か必要なもの)
ステンレスワイヤー、アルミワイヤー、アクリル、テグス、フィルム



ノグチミエコ (会員) 宇宙庭園
ガラス

BOX 展応募作品



可児友紀（会員） ブーケ (bouquet)
ガラス



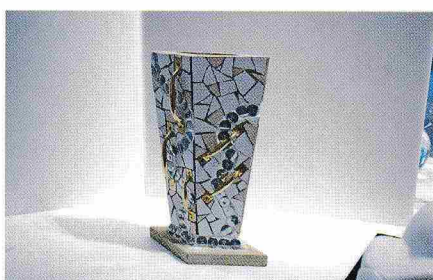
久野博美（一般） ナトリ
ウール、麻、ステンレス



甲田祐子（一般） たまむし
フェルト



松田静心（会員） 無
コルク



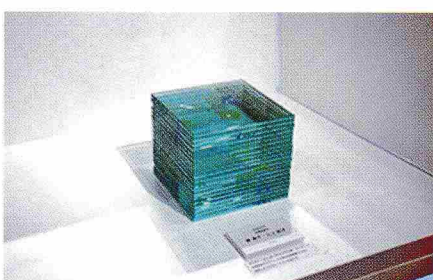
松本治子（会員） 越境する陶片
タイル、金属



神 まさこ（会員） 無題
陶器



山本 誠（会員）
故不破由晴の ORIGAMI 皿と山本誠の「生きものたち」



三上紀子 星 素子（会員） 琉艶 (リュウエン)
ガラス



吉野ヨシ子（会員） 芽吹
ステンレス、アルミ、銅

BOX 展に参加して

美術家
日本建築美術工芸協会会員

久常久美子



私は、昭和15年頃には、世界のハッカの7割程を生産した町として有名であった北海道北見市で生まれました。現在では、質の良い玉ねぎの生産に力を入れている地区です。

北見市立西小学校に入学し、1年生から4年生までの間、担当された美術大学出身の女性教師の影響で、図画工作が大好きになりました。これが、私の作品作りの原点で有るような気がします。

その後、北見市から結婚のため、埼玉県大宮市に移り住みました。

大宮での生活の中で編み物の先生に個人指導を受けている過程で、既製の糸では物足りなさを感じ、好きな彩と糸で作品を創りたいと思うようになりました。

雑誌「毛糸だま」に東京テキスタイル研究所で、糸を創るクラスの様子が掲載されていたので、早速入学の手続きをとり、「糸を創る」クラスを初め「織」、「染色」、「糸からの動き（造形）」、「フェルト造形」の各クラスで学びました。在学中に体調を崩し、入退院を繰り返しながらも、日常の生活の中に物創りに取り組むことを強く望むまでに回復し、作品創りも出来るようになってきました。

そのような時に、新作展の会場で、タイミング良く以前東京テキスタイル研究所で指導を受けていた時、発想や個性を大事にし、指導力の大きさを尊敬していた先生とお話をする機会がありました。

先生が各人の望んだ授業内容で年14回、少人数のグループ教室を開催していることを知りました。教室の場所は、私にとって交通の便も良く、数年ぶりに心躍る気持ちで、入会

させていただきました。

メンバーは、年齢・職業等それぞれ異なり、また驚くほど遠方からの方々が切磋琢磨しながら共に学んでいました。

当たり前になりそうな日常生活で感動したことを探しながら、それらを表現するテーマを各人がピックアップし、五感を研ぎ澄ましながら発見する授業の面白さを感じています。

例えば私のように、生きることは死の営みの一部で有ることを体験した者として、今回の作品もそのことを題材としました。

「BOX展-繋ぐ」の数々の素晴らしい洗練された作品の中で賞を頂いたことは、私にとって正しく晴天の霹靂でした。

今まで、他の展示会場に見に来てくださっていた方々に、感謝の気持ちでBOX展の写真とメッセージを入れ、最優秀賞に選ばれたことを報告しました。すぐに、電話・メールや好きな詩人の一節を手紙に書いてのプレゼント、作品についての感想が届くなど、こんなに喜んでいただき改めて最優秀賞をいただいたことがうれしく、涙が止まりませんでした。

これからも小さな一歩を大切に「継続は力なり」、体調をコントロールしながら、活動していきます。

活動記録

1993年 東京テキスタイル研究所で学ぶ

94年 織展 / 東京テキスタイルギャラリー / 世田谷区

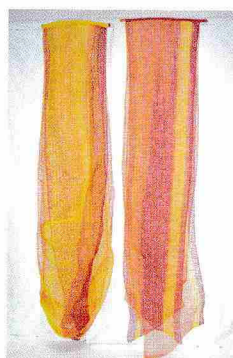
97年 糸からの動展 / 東京テキスタイルギャラリー / 世田谷区

2005年 回路展 / ギャラリーくぼた / 東京 京橋

12年 テキスタイルNOW展 / 世田谷美術館区民ギャラリー

14年～17年

テキスタイルNOW展 / 東京山脇ギャラリー / 千代田区



2013年 「朝陽」

早朝や夕方のウォーキングコースは、近くの堤防で晴れた日には遠方に富士山が見え「朝陽」が顔を出す。強烈に勢いよく昇る朝陽は丸く美しい。茜色に染まる夕陽。アッと言う間に山影に消える。

2014年 「ぼたん雪」

月の光に照らされて、ひらひらと幾重にも重なり合って降ってきた、ぼたん雪深々と降っている光景を眺めていると桜吹雪の様に見えてきた。



2013年 「和む」

受話器の向こうから聞こえてくる、遠い北海道の兄弟、友人、知人達からの懐かしい声、楽しい会話に心が和む。転居で馴染みの薄い環境に居た私にとっては、原動力でもあり活性剤になった。

2015年 「耳」

顔の左右に耳がある。人それぞれに、違った形があり、気になると色々な耳を探したくなった。また、面白がって自分の耳を鏡に映し創ってみました。



■新入会員・会員の異動 2016年7月～2016年10月(敬称略)

2016年9月 個人情報保護法の改正が成立した事を受け、個人は氏名のみ、法人は会社名・代表者又は担当者を掲載致します。

《新入会員》

個人会員	安部大雅(彫刻家)、薄井賢一(菊川工業)、岡野正人(建築家)、東條隆郎(建築家)、森田高年、吉田 実(建築家)、渡辺直子(菊川工業)、久常久美子(美術家) 池田郁雄(金工家)、早津和之(静岡県庁)		
法人会員	安藤物産(株)	代表取締役社長 安藤謙一郎	〒192-0053 八王子市八幡町 8-4 TEL.042-627-5511
	杉田エース(株)	代表取締役 杉田裕介	〒130-0021 墨田区緑 2-14-15 TEL. 03-3633-5150
	(株)横森製作所	代表取締役 有明利昭	〒151-0072 渋谷区幡ヶ谷 1-29-2 TEL. 03-3460-9230

《会員の異動》

	芦原建築設計研究所	代表者変更	代表取締役 芦原太郎 (前任 石岡俊二)
	(株)鎚絵 東京支店	所変更	〒154-0004 世田谷区太子堂 3-16-3-1 F
	元旦ビューター工業(株) 東京支店	住所変更	〒104-0061 中央区銀座 1-16-1 東貨ビル8F
	旭ビルウオール(株)	担当者変更	経営企画室室長 藤山宜貴 (前任 生駒哲朗)
	(株)石本建築事務所	代表者変更	代表取締役社長 長尾昌高 (前任 石井 誠)
		担当者変更	執行役員 .Principal Architect 能勢修治 (前任 加藤淳一)
	内山緑地建設(株)	住所変更	〒104-0032 中央区八丁堀 4-9-13 ニチレックビル5F
	宇部建設資材販売(株)	代表者変更	代表取締役社長 有富 覚 (前任 河内正雄)
	(株)NTT ファシリティーズ	代表者変更	取締役 エンジニアリング&コンストラクション事業本部長 松原和彦 (前任 横田昌幸)
	大塚オーミ陶業(株)	代表者変更	代表取締役社長 大杉栄嗣 (前任 舟戸正巳)
	(株)大林組	代表者変更	執行役員 山本朋生 (前任 小林照雄)
		担当者変更	設計本部副本部長 賀持剛一 (前任 山本朋生)
	(株)カネカ	代表者変更	住宅 Strategic Unit リーダー 池上 淳 (前任 田中 稔)
		担当者変更	住宅 Strategic Unit 谷川史浩 (前任 加藤 淳)
	菊川工業(株)	担当者変更	渡辺英明 (前任 薄井賢一)

法人会員	郡リース(株)	住所変更	〒106-0031 港区西麻布 3-20-16 西麻布アネックスビル
	コトブキシーティング(株)	担当者変更	営業部営業開発部室長 戸澤普一 (前任 佐藤勇樹)
	神鋼ノース(株)	代表者変更	代表取締役社長 畑中邦彦 (前任 遠山茂幸)
	(株)染野製作所	代表者変更	代表取締役社長 染野省三 (前任 染野悦彦)
	(株)高島屋 スペースクリエイツ	代表者変更	専務取締役 営業本部長 浅野吉丸 (前任 梨本辰夫)
	(株)竹中工務店	代表者変更	執行役員設計本部長 川合智明 (選任 菅 順二)
	(株)TAC プロパティデザイン事業部	担当者変更	永石光弘 (前任 平田裕太郎)
	TOTO(株)	代表者変更	特販本部副本部長 田中正弘 (前任 佐藤仁美)
		担当者変更	特販第1部特販第1課 伊藤剛士 (前任 佐藤仁美)
	ナブコシステム(株)	担当者変更	営業統括部営業開発部 部長 本田 浩 (前任 鈴木敏正)
	(株)野口硝子	担当者変更	工務主任 可児友紀 (前任 入澤郷子)
	ヒガノ(株)	担当者変更	東京営業所所長 腹子達朗 (前任 古井弘文)
	不二窯業(株)	担当者変更	取締役工事統括部長 田中信之 (前任 森田高年)
	みはし(株)	担当者変更	青木勇弥 (前任 高安晃久)
	(株)メック・デザイン・インターナショナル	代表者変更	代表取締役 取締役社長 渡邊顕彦
	(株)森ビル	代表者変更	代表取締役社長 辻 慎吾
	(株)YAMAGIWA	代表者変更	東京ソリューション営業部統括 松川晋也
	(株)LIXIL	住所変更	〒169-0074 新宿区北新宿 2-21-1 新宿フロントタワー
		代表者変更	常務役員 LIXILジャパンカンパニー営業開発本部長 老川忠志 (前任 神谷宣夫)
	(株)東芝	会社名変更	東芝インフラシステムズ株式会社
	(株)安井建築設計事務所	担当者変更	岡田裕美子 (前任 田中千晴)

編集後記

会報77号から表紙の写真が替わりました。協会会員川上喜三郎氏の作品「光と影、そして反射」シリーズ「蜃気楼舞台」です。川上喜三郎氏はロンドンで設計活動を始め、やがてAAスクールの教授を務め、彫刻家としても幅広く活躍されています。協会の重要な事業である芦原義信賞(新人賞)の賞牌は川上先生の作品です。川上先生には会報の表紙への作品写真のご提供を3回お願いしていますが、次号の表紙も楽しみなところです。

会報には、会員の皆様からのご意見、ご希望、原稿の執筆をお願いしていますので、広報委員会への投稿をお待ちしております。また会員個展・催し物の広告掲載も可能です。詳しくは、広報委員会・事務局にご相談ください。

aaca 2017.7 no.77

発行人 会長 岡本 賢
発行 一般社団法人 日本建築美術工芸協会
〒108-0014
東京都港区芝 5-26-20 建築会館 6階
TEL 03-3457-7998 FAX 03-3457-1598
URL <http://www.aacajp.com>
E-Mail info@aacajp.com

編集 広報委員会
委員長 飯田郷介
会報担当副委員長 野口真理
会報編集委員 五十嵐通代 石田 真人
田島 一宏 山下 治子

編集制作協力 株式会社 アム・プロモーション